



TITLE:

水澤だより

AUTHOR(S):

CITATION:

水澤だより. 天界 1927, 7(81): 509-509

ISSUE DATE:

1927-11-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/161205>

RIGHT:

水澤だより

八月の末から九月へかけて、水澤の天気は非常に悪く、殆ど半月の間に漸く三つか四つの星しか観測出来なかつた。何でも一應算盤に置かれれば承知しない男が、観測者の俸給を日割に勘定して星の數に割りあてゝみたら、一つの星の見料が七拾圓近くについてゐたさうである。随分値のいゝ星だつた。然し幸あさで天候が回復したので、星の値段も米の相場と共に暴落した。その後先づ無事に暮してゐる。去年の夏パンベルヒから買入れた天頂儀は、観測室の建築や何や彼やでそのまゝになつてゐたけれど、昨今やうやう据附が終り、九月の初から正式に使用されてゐる。すくなくともこゝ一年間は新舊兩天頂儀で同時に観測が行はれる筈である。お氣の毒なのは二人の観測者川崎、山崎の兩技師で、一晚だつてのびのびさ、枕を高くしてねむる事もならず、それでゐて責任上うつかり風も引けないといふ始末であるが、仕方がない。これも前世の戒行のつたなかつた故さあきらめていたゞかう。この同時観測はかつて山本先生によつて行はれたこともあるけれど、今度のは同緯度上に二つの大天頂儀を置いたのだから、前のさにかばつた新しい結果が出て来ると思はれる。緯度の變化の観測にはまだまだ謎がある様だ。その謎のどれか一つが、この観測によつて解けないかも知れない。さにかく氣長に、せいぜい勉強していたださう。

新天頂儀は壹萬六千八百參圓で、註文してから三年目に届いたものである。古いよりは口徑が心持大きい、前のにくらべて改正された所もあるが、改悪され

た所もある。あちらこちらに矢鱈に目盛をつけたり、照明の裝置をしたりして、一見甚だ親切に出来てゐる様に感じるけれども、實地に使用して、そこそこに手を入れてみると、むしろ粗製品といひたくなる。例へば一寸したネズが横つちよに向いてゐたり、發條の工合が悪かつたりしてゐる。差引勘定してみると、頭は幾分よくなつたが手は悪くなつた。パンベルヒ老いたりさ川崎技師はいつてゐた。

パンベルヒも老いたらうが水澤の秋も更けた。一週間も前に、むかうの山には雪が降つた。もう冬がそこまで来てゐる。然し何さいつも水澤は秋がいい。平安朝や奈良朝の都びさが秋に興じた野は、世も昭和になつた今日、もう烟になつてしまつた。その昔を夢にみて、いゝ氣になつてそこらなうろついてゐるさ百姓が怒鳴る。あの頃の悠長な心で野山を樂しみたい者は、もう水澤へ来るより外はあるまい、東北の野さ山はほんさにいゝ。秋、遠くまでひろがつた小松原を、きのこをあさりながら歩く心地よきには確かに命がのびる。山崎技師と川崎技師とは、夜は観測をして晝は頻繁に命をのばしてゐる。あの鹽竈では百年の長壽うたがひなしである。池田技師は山はきらいださうだ。その代り川へ釣に行く。成績は小鰻四五尾さまりである。いつだつたかこの池田技師、めづらしく鰻をどつさり釣つて來たことがあつたので、所員一同恐れ入り、天氣豫報の旗をあげなほさうとした。それにしてもあまり不思議ださういふので、内々さぐつてみた所、二十世紀の太公望は、蚯蚓を針につける代りに、造幣局出來の餌で釣つて來たものと分つた。何にしても結構な世の中である。十月十八日 X 生